史談会研修旅行　十月二十二日ー二十四日

椎葉・球磨地方の文化財探訪

球磨地方は七百余年も続いた相良氏の、特色のある鎌倉時代の文化財が多数残されているので、詳しい報告をまとめたが、残された紙数は二頁しかない。これではどうにもならない。

椎葉の鶴富屋敷はあまりにも有名だから省略する。

椎葉から九州山脈を横断する高い山々の眺めに見とれながら、湯山峠を越えるといよいよ上球磨（多良木町・湯前町・水上村）の地で、上相良氏の鎌倉期の文化財・遺跡の宝庫である。宮崎県側の道路工事などで時間が二時間近く遅れ、青蓮寺に着いた時は四時を過ぎていた。

多良木町助役・文化財調査委員の方など五名が待ちくたびれていた。一行は恐縮して謝るばかり。

青蓮寺阿弥陀堂（重文）の端正なたたずまいにはっと息を呑む。素朴で清らか、静寂そのものの境内、折りからの夕日を浴びた建物は、今までの多くの研修旅行でも見たことのない建築様式で、何とも言いようのない雰囲気をかもし出している。

阿弥陀堂は永仁三年（一二九五）上相良三代頼宗が、初代頼景の廟所として建立したもので、この様式の建築としては熊本県下で最大規模のものという。堂内には本尊阿弥陀如来、脇侍観音・勢至菩薩（何れも重文）が薄暗い中に立っている。すこし腰をひねった両脇侍の姿が美しい。

阿弥陀堂の裏の上相良墓地は青蓮寺古墓塔碑群（県文化）と呼ばれ、鎌倉期の五輪塔・板碑などが数えきれない程である。

貞応元年（一二二二）の建立という最古の城泉寺阿弥陀堂をはじめ、生善院観音堂（猫寺）等すべて青蓮寺と同形式の建物である。城泉寺の九重・七重石塔（ともに重文）もいつまで眺めてもあきることがない。

七百年の歴史を秘める人吉の相良墓地の広大さ・多様さは、各地の大名墓地を見馴れた一行も驚く。

その他百太郎溝取入口旧樋門（鎌倉期）の石材の巨大さ等々、すべて目新しく書けばきりがない。

球磨川下りの川舟できく正調五木の子守唄の切々たる哀調が、川面をわたり、山峡にこだまするのも忘れられない。

金の箔おくごと秋日笹むらに　占魚　の句碑が境内にある。方五間寄棟茅葺で、この様式の建物としては熊本県下で最大規模のもの

青蓮寺阿弥陀堂（重文）（多良木町黒肥地）

城泉寺九重石塔（重文）
（湯前町城泉寺）

観音菩薩（重文）
青蓮寺阿弥陀堂脇侍